

### 講演 1903・啄木百年

Yuza, Shogo / 遊座, 昭吾

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

69

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

8

(発行年 / Year)

2004-03

〈講演〉

## 一九〇三・啄木百年

## 遊座 昭吾

53年前という、途方もない昔のことを、思い出してみますと、真つ先に浮かんで来るのは、ここ法政大学日本文学科の学生、20代の自分であります。ところが、不思議なことに、今の自分の意識・感覚とあまり変わっていないのです。このことは、どう捉えていいのか、迷います……。近藤忠義先生と片岡良一先生のゼミを受けました。近藤先生の近世ゼミは、席に着かれるやいなや、いつも開口一番は国家を撃つ激しい弁舌でした。しかし、こと江戸文学を入りますと、細かなデータを正確に示されるといって、地道な実証主義の学者に変わられる……。その動と静をもつ先生に敬服したものです。私は卒論に近松門左衛門を選びましたので、先生から厚くご指導を受ける機会を持ちました。そこで、文学研究の原論というものを、私なりにですが賜ったと思い、今に至るも有り難い先生であります。

和服姿で風呂敷包みを抱える、片岡先生のスタイルは目に焼き付いております。少し咳き込みながら、「だから……、だから……」

「……」と言つて展開する漱石ゼミの口調には、引きつけられたものです。接続詞「だから」の連発……。知的で魅力的でした。よく真似たものです。だが、先生に対する印象は、その時から今に至るまで変わりなく、怖い先生なのです。私の書架に並ぶ、『片岡良一著作集』全一巻（中央公論社・解説小田切秀雄）、『近代日本の作家と作品』（岩波書店）、『西鶴論稿』（萬里園）の著作に、今でもジツト見詰められている……。という感じ

です。  
小田切秀雄先生は休職中でしたが時折見えられ、近藤先生の研究室でお話を聴きました。私にはたいへん眩しく見えました。なにせ、いろいろの文芸雑誌に書きまくっておられる文芸評論は、戦後文学の方向を示すものですから、学生の私たちにとつても、同時代的テーマだったわけです。輝いていました。先輩小田切さんの存在は、誇りでありました。

古代の西郷信綱先生、中世の永積安明先生、近世の重友毅先

生、国語学の西尾実先生は、私等には講義がなく、専ら著作を通して知るだけでした。学外に目を向けますと、そこに日本文学協会の存在があります。私も入会して、大会には未席ながら参加したものです。委員長近藤先生の挨拶、中世文学の討論における永積先生の論及ぶり、その姿を今でも思い出すことが出来ます。学会という世界を、垣間見たのはこの時でした。いずれ、法政日文の教授陣は錚々たる顔ぶれで、日文協は勿論のこと、岩波の『文学』すらも動かす……と、学生の私達は誇らかに思い込んでいたものです。

卒業して、新聞記者と教師を勤めます。新聞記者は一年で失格する落ち<sup>こぼ</sup>れですが、この時が後に貴重となります。草野心平の講演を取材しましたが、心平が演壇で瞑目して、「いかりのながさま青さ／四月の気層のひかりの底を／唾<sup>つば</sup>しはぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ……ああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」と、宮沢賢治の「春と修羅」を切々と口ずさまれたのには、感動を超えた衝撃を受けました。その一瞬は忘れられません。本物の文学感動というものを与えられたと思つていきます。教師は公立高校・私立大学合わせて、四十五年勤めました。この教師時代は、一つ一つの点を刻む、その連続だったように思われます。

その最初の点は、一九五七年（昭和三二）に訪れます。ひどく興奮しました。日本文学協会の雑誌『日本文学』に、論文「啄木短歌の考察」を発表した時です。発行人は近藤忠義先生であります。暫くしての一九六八年（昭和四三）、筑摩書房

の『啄木全集』第八巻・「啄木研究」に、「啄木伝覚え書」を載せていただきます。編集委員であつたのが小田切秀雄先生で、「解説」に「新進研究者の論文は、現在も次々と若く新しい研究者が登場している状況からして、もっと多く収録したかったが、スペースの関係で相馬庸郎・今井泰子・遊座昭吾の三氏のものだけになった。」と記されました。その二年後、私の故郷玉山村渋民に「石川啄木記念館」がオープンしますが、そのディスプレイを私が担当します。翌年、私の処女作となる『啄木と渋民』を刊行しましたが、ノーベル物理学賞の湯川秀樹さんと芥川賞作家の小島信夫さんが、謹呈申し上げなかつたのにお読みいただき、掛替えのない出会いをいただきました。ちょうど、啄木の母校旧制盛岡中学校・現盛岡第一高等学校に勤務していた時のことです。一九八六年（昭和六一）、啄木生誕百年祭と新石川啄木記念館の開館行事が、同時に催されますが、その企画とディスプレイに関係をもちます。翌年、『石川啄木の世界』を刊行しました。

大きな一つの点が、盛岡大学文学部日本文学科時代にやつて来ます。一九八九年（平成一）年二月二日、国際啄木学会を設立し、会長は岩城之徳日本大学教授、副会長は上田博立命館大学教授、事務局長は私となり、事務局を盛岡大学に置きます。翌年、創立記念盛岡大会を盛岡大学で開催し、以後は台湾台北・京都・函館・東京・韓国ソウル・渋民・釧路・静岡・奈良・茨城・盛岡と大会を続けて参りました。その渋民大会は、啄木生誕一一〇年・賢治生誕一〇〇年記念の時でしたので、岩手県挙げての「啄木・賢治生誕祭」となります。その時、私が

会長となります。そして二〇〇一年・二二世紀に、国際啄木学会編『石川啄木事典』を「おうふう」から刊行します。法政大学国文学会『日本文学誌要』第六七号で服部一希さんが理解のある書評を書いて下さいました。

近松門左衛門を卒論とした私が、長い教師時代にまるで点のようなものを、幾つか刻んで来ました。私自身が意識した目標・意思をもつて刻んだというよりは、いつも与えられて来たとしか言いようがありません。ところが、振り返って見ますとその一つ一つの点は、奇妙にも繋がって線になってくるんです。不思議です……。事實は小説より奇なりです。

現在も、昨年からある作業を続けておりますが、これもまたしっかりとした動機・方法論があつてのものではない……。だから、いつも試行錯誤なんです。『岩手日報』に、明治三四年一月から翌三五年六月までの半年間、石川翠江・麦羊子・白蘋・ハノ字の署名でもつて、発表した作品群があります。まだ、啄木という号が編まれる以前のものです。「啄木全集」には収録され、勿論、目は通しております。だがある時、ふと原資料・原テキスト即ち『岩手日報』に当つて見たい……と思つたのです。今では国会図書館にしかないものですから、岩手日報社に頼んで……。この時一年間でも勤めたことが生きて来るんです）その紙面のコピーを入手し、この目で見たのです。言うなら、明治三四三五年の同時代に立つて、生な紙面に目を当てたのです。つまりリアルタイムな処理です。すると、凹凸のない全集の活字の羅列とは違つて、その時代の意匠・レイアウト・雰囲気までが読み取れるような実感が湧いて来まし

た。原資料の価値でしょう。

翠江は短歌を、明治三四年一月三日から翌三五年元旦まで、計七回二五首発表しています。三四年一月というと、二〇世紀元年の暮れです。中学四年の翠江は、新世紀とともにメディア『岩手日報』に短歌作品を発表したのだ……。新鮮な感動を受けました。その彼が号を麦羊子と変え、一月一、二日と二回、蒲原有明の処女詩集『草わかば』の書評を載せますが、元日に刊行された詩集を入手し、分析読解し、執筆して、一〇日後には『岩手日報』に載せているのです。本邦初の書評でしょう。「牡蠣の殻」を「見るべき代物」と評価します。この評価基準は今の文学史に照らして全く正当です。しかも、「用語を選択して文字上の晦渋を避けること」「構想取材の範囲を拡張して貫きたい事」と、注文までつけて筆を擱いているのです。満一五歳の中学四年生が……。しかし、私が驚嘆し、喝采を送りたいのは別です。その時代も今日でも誰も問題にしない詩で、全二三編中から彼が「圧巻の作」「白眉」として、真つ先に取り上げ、対句・比喩表現・韻律を分析した詩は、詩集の最後を飾る二六連八〇行の長編詩、最も難解な「高潮曙のうた」だったことです。麦羊子の独自性、閃きをそこに認めます。

兼好法師が、「日ぐらし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」と告白した、狂気・筆がもつ魔性の虜になつていたのかも知れません。作家となる必須の体験を、一五歳で嘗めていたのかも知れません。白蘋、ハノ字になります

と、堰を切ったように中央文壇の状況を洗い捲り、書き捲ります。そして、遂には思想も経歴も奇怪極まりないロシアのゴルキイとか、社会規範や義理人情を逸脱して、生まれつきのまま生きる自然児、田山花袋の『重右衛門の最後』の主人公に、異常な目を向けていく。それは、友への書簡に記した「Heaven sent Genius」・天が与えた資質・天才への畏敬から来ていたのでしょうか。そういう人間観から、新時代の文学の方向を予測していたのかも知れません。

ペンネーム翠江・麦羊子・白蘋・ハノ字の時代、私は「啄木以前」と呼んでおりますが、その時代を今のところ、こう整理しております。一五・一六歳、中学四・五年生の半年間、計一八回、字数にして短歌を除き一三、〇〇〇字、原稿用紙にして三二枚、一回三枚平均、新聞紙面としては堂々たる量、内容はすべて中央文壇の同時代批評、メディア『岩手日報』の一面の中段に発表され、生命をもつ作品として読者をもった。見落としてはいけないエポックである。（この直後の一〇月二七に、盛岡中学を退学する……ということも含めて……）

退学直後、上京した石川白蘋は、新詩社の集會に出席しまして、『明星』の主宰与謝野鉄幹・晶子をはじめとする詩人・歌人等に会います。その中に、三歳年上の碎雨こと高村光太郎もおりました。翌日、渋谷の鉄幹を単独で尋ねます。鉄幹はすでに『明星』に短歌を投稿し続ける、中学生白蘋の歌一首「血に染めし歌をわが世のなかりにてさすらひここに野にさけぶ秋」を、一〇月一日号に載せており、その名は知っておりませし、それに昨日の集會でも会っております。それにしても単独の訪

問でした。

しかし、まるで旧知の友のごとく、一切の壁を設けず対してくれます。ただ、厳しく言い放ったことばがありました。「和歌も一詩形には相異なけれども今後の詩人はよろしく新体詩上の新開拓をなさざるべからず」「君の歌は奔放にすぎ」です。「明星」一一月号に二首、一二月号に三首と、月を追って歌数も増えます。だが、目次には「菊あわせ（短詩）新詩社同人」「紅葉（短詩）新詩社同人」と多くの同人と込みで、見るべき発表ではありません。むしろ目を向けたいたのは、上京時から書き綴った日記の内容です。寂寥・悲愁・思想紛糾・苦悶・遊子・茫漠・運命・涙・発熱・悪寒頭痛という漢字の羅列、一方ではセークスピーヤ・トルストイ・ニイチエ・バイロン・ウラルズ・ユルス・イブセン・ゴルキイという片仮名の羅列です。この漢字と片仮名の羅列から、上京中の石川白蘋の心象を読み取りたいものです。

そして遂に上京して一か月目、一二月一日の日記にこう記すのです。

あゝ汝故郷よ。岩峯の銀衣、玉東の白袖、夫れ依然として旧態の美あるか。江東菅而、故郷を論じ「形逝いて神遊ぶ」と云へり。宜なる哉。郷村不段の自然の靈、今尚ほ、清秀の趣を湛えて、初冬の瀟氣、朴直の農人の胸に呼吸せらるるか。吾たえずあゝ吾堪えず。

冒頭の「あゝ汝故郷よ。」と文末の「吾たえずあゝ吾堪えず」

は、見事に対応しております。白蘋は故郷に呼び掛け、尋ねかつ訴えます。白蘋の重大な瞬間です。岩手山と姫神山は「旧態の美」・昔ながらの美しい姿か、わが村里は変わらぬ自然の神秘なる霊を、今もやはり湛えて、質朴・実直な百姓はその澄んだ空気を胸いっぱい吸っているか……と質し、「吾たえずあゝ吾堪えず」と繰り返すのです。重大な瞬間とは、白蘋が故郷・「ふるさと」と対話を持ったという瞬間です。

疲労困憊・神経磨滅の情態に陥り、父に伴われ翌明治三十六年二月に帰郷します。僅か四か月の東京生活でした。自身でも無惨な「失敗の児」と呼びます。その敗北者の姿を故郷に晒しながらも、でもワグネルを英書で読み、研究し、「ワグネルの思想」を『岩手日報』に七回連載したり、『明星』七月号に四首、一月号に一二首も載せるのですが、依然として他の同人との込みは変わりません。

ところが、『明星』の紙面ががらりと変化します。この紙面の変化を知る者は、恐らく三人だけでしょう。奇怪なことを言う……とお思いでしょうが、確信があります。一人は『明星』の主筆鉄幹、一人は白蘋自身、そしてもう一人はこの私です。私は原典の『岩手日報』の紙面に直に目を向けました……。それと同じく『明星』の復刻版を手で捲り、目で追っていったのです。明治三十六年二月一日号、その頁を捲りました。一六頁に石川白蘋の歌四首があります。これも七名込みの待遇ですが、何気なく五頁捲りましたら、「啄木」という漢字が目に入り込んで来ました。「愁調」と題する詩五編が三頁に亘って載っている。衝撃でした。全集には、短歌は「第一巻歌集」編

に、詩は「第二巻詩集」編に載っておりますが、『明星』二月月号では五頁隔てて、同じ雑誌に載っている……。

衝撃の余韻が続きます。主宰鉄幹が記す巻末の「社告」には、翌三七年の新年号の予告として、「長詩には梨雨、蒼梧、啄木、碎雨、鉄幹等の作あり」と、鉄幹は自分の名の側に光太郎と啄木を寄せ並べて、文壇に予告している。裏表紙には「本号には薫、紫紅、梨雨、啄木諸氏の長詩」とある。最後に目次に目をやりました。今までの目次には石川白蘋の名は一切載りませんでした。が、「愁調（長詩）石川啄木」とある。この時、詩人石川啄木、文学者たる人格をもつ啄木が、日本の文壇にデビューし、歴史に記録された……のです。無惨な敗北者は蘇ります。この『明星』の紙面の変化に、白蘋は一番驚いたでしょう。私はそれを追体験したまでです。その紙面をレイアウトしたのは、新詩社の主宰、『明星』の発行人と謝野鉄幹でありました。鉄幹の啄木評価が、意識的にその紙面をレイアウトしたと信ずます。

詩「愁調」五編、その中心の詩が「啄木鳥」であります。

いにしへ聖者が雅典アテネの森に撞きし、  
光ぞ絶えせぬ天生『愛』の火もて

鑄にたる巨鐘、無窮のその声をぞ

染めなす『緑』よ、げにこそ霊の住家。

聞け、今、巷に喘げる塵の疾風

よせ来て、若やぐ生命の森の精の

聖きを攻むやと、終日、啄木鳥さつぎどり、

巡りて警告夏樹の髓にきざむ。(詩集『あこがれ』より)

この詩は西欧の叙情詩の一つ、八行と六行からなる一四行詩ソネットです。冒頭の八行を読みました。その前半の四行が重要な場面の設定で、静かな調子で描写されています。(いにしえ聖者・愛知者プラトンが、アテネの森で打ち鳴らした、光の絶えることのない天の賦与した『愛』、その炎で溶かし造つたという大鐘の限りもない響きを吸収した『緑』の深い野よ、まことにそこは神秘的な霊の住家だ……)。プラトンは旅に出て、四十にしてアテネに帰り、その郊外の森にアカデメイア学園を創設し、『愛』・エロスが宇宙を包み込み、総てを、人と人を、人と動物と、人と物をも結び付ける……と説いたので、重要な場面とは、カッコ付けの『愛』、『緑』の連合によつて創造された、しかも「霊」の籠もる「森」です。森は自然のまま、樹木の茂る聖堂・聖域を形成し、聖者の安息の場であります。鳥居とはその入り口を意味しました。

続く四行は、テンポを変えて、「聞け」、「今」、「寄せ来て」、「聖きを攻むやと」、「終日」、「啄木鳥」と、読点を六つも打ち、ことばを切り刻んでいきます。緊急事態のアピールなのです。まず、地上に垂直に立つ樹木を配し、その樹木の芯を嘴で叩くキツツキドリを登場させます。その鳥に樹上から緊急事態を告発させる。(今……現代、巷に吹き荒れる塵あくたの汚れた突風が、萌えいずる生命の森の根源、精なるものを損ない犯そうとしてはいないか)と。詩人はその告発を受け、(終日、啄木鳥が森を巡り、戒めを夏の樹木の芯に刻むあの木霊を聞

け)とアピールするのです。それは詩人の叫びです。私はこう読み解きたい。『愛』を踏み躪り、『緑』を破壊し、「霊」不在の時代にいつまで盲進し続けるのか……と戒め諭す、あのキツツキドリらの信号・ドラミングを聞け!と。

奇想天外なる発想、精密に編まれた構成、キーワード『愛』『緑』『霊』『森』の配列、詩的韻律、緩急のテンポ、なによりも二〇世紀という時代を見詰める目、それらが総合されて創られた詩です。歌人石川白蘋の胸中には、いつも師鉄幹の「君の歌は奔放に過ぐ」、「今後の詩人はよろしく新体詩上の新開拓をなさざるべからず」とすることばが去来していました。その彼にある瞬間が訪れます。疲弊した体、衰弱した神経を、故郷渋民の曹洞宗宝徳寺で癒す彼が、裏の万年山の森にキツツキドリのドラミング・木霊を聞いた時です。忽然として幻想・ファンタジーに酔い、瞑目莞爾して息を殺し、ペンを握りました。だが、記されたのは、五七五七七の奇数韻律・歌ではありません。四四四六の彼の編み出した偶数韻律のソネットでした。初めての/new body 詩です。

奇想天外なる発想と申しましたが、それは改めなければなりません。世界の民族が、古来からキツツキにある思いを込めていました。キツツキに一種の象徴性をもたしていたのです。インディアンは嵐や雷の災厄を救う鳥、ポニー族は種族を守る安全のシンボル、東南アジアのセマン族は聖なる恵みの英雄、そしてギリシア・ローマは予言の鳥、アイヌはチップタツチカップカムイ、即ち「舟を掘る神様」としておりました。啄木はそのことを知っていたかは分かりません。だが、彼の詩的直

観は、間違ひなく世界の民族が知恵をもつて体得した古来からの習慣、習俗伝承、つまりエートスに触れていたのです。

師である与謝野鉄幹は、期待に応えたその詩を高く評価し、「石川啄木」として『明星』誌上に誕生させます。その時、明治三六年一月一日、一九〇三年、遡る百年前でありました。万年山宝徳寺という霊境に、啄木は明治に、私は昭和に育ちました。百年前、彼は万年山の森に響くキツキドリの木霊に打たれ、自分を啄木として出発します。百年後の今年、私は漸くそのことを読み解きます。いや、それは万年山の因縁による……としか言いようがありません。啄木に誘われたのかも知れません。ご静聴頂き、感謝申し上げます。有り難うございました。

(ゆうざい しょうご・一九五一年卒 元盛岡大学教授 元国際啄木学会会長)

\*二〇〇三年度法政大学国文学会大会にて講演

(二〇〇三年七月一二日、法政大学五八年館八五七教室)